



IN THE CASE of ARK NANABANKIN  
“余白”を楽しめる大人の特別空間。  
《ARK 七番館》

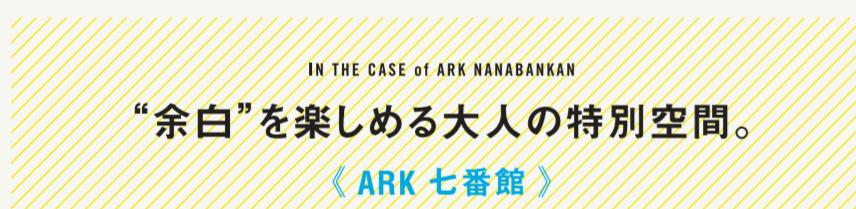


都心へのアクセスが良好、それでいて下町的な雰囲気も残る街・高砂。1969年にこの街に建った「ARK 七番館」はコンパクトながらブラック&メタルの外観が一際目を引く建物。スペース R デザインは、このビルの4階フロアにある住居のリノベーションに着手。リノベーションが完了した1戸はいち早く入居者が決まり、現在は2戸の施工が進行中である。それぞれ間取りは異なるが、バルコニーを活かし、入居者が自分流のスタイルでアレンジできるよう“余白”を持たせたのが大きなポイントだ。アプローチしたいターゲットはこの“余白”を使いこなせる大人。たとえば、熟練の料理人がクセのある素材を巧みに料理するように、この

部屋も暮らしに対するスタンスが成熟し自分流のスタイルを持つ大人にこそふさわしい。施工が進む2戸は人気の高い土間を有するプランなどになる予定。高砂という好立地な街の魅力も踏まえ、住居としてはもちろんSOHO的な使い方にも柔軟に対応できる特別な空間にしたいと考えている。

ARK NANABANKIN  
ARK 七番館

【構造・規模】 RC 造4階建  
【築年】 1969年(昭和44年)  
【所在地】 福岡市中央区高砂1-22-2



IN THE CASE of TAMAGAWA BLDG.  
顔が見える、心ふれあう集合住宅。  
《玉川ビル》



いくつものレトロビルを訪ねていると、住民同士の顔が見えるお付き合いが残る集合住宅と出会う時がある。福岡市南区の清水四ツ角に建つ「玉川ビル」もそのひとつ。1968年に建てられたこのビルは先代の意思を受け継ぎ、オーナー自らがビルを掃除し、傷んだ部分を修繕するなど、日々メンテナンスを繰り返しながら大切に育ててきた。共用部には入居者が気持ち良く暮らせるようにと、隅々まで心くばりが行き届いている。廊下で会える誰もが明るく挨拶をし、立ち話に花を咲かせる。こうして現代では貴重な“ひど”がふれあえる魅力的な建物の素地が、すでに「玉川ビル」にはできていたのだ。2009年のリノベーションによ

あたりスペース R デザインは、これからも入居者に愛される居心地の良い空間をめざして「cozy」というコンセプトを提案。心優しいオーナーの人柄が伝わるような、使いやすい間取りとナチュラルで柔らかな印象の内装に仕上げた。そしてリノベーション後、「玉川ビル」には今も昔と変わらない、入居者とオーナーとの風通しのいいふれあいがある。

TAMAGAWA BLDG.  
玉川ビル

【構造・規模】 RC 造7階建  
【築年】 1968年(昭和43年)  
【所在地】 福岡市南区清水1-24-18



IN THE CASE of RENOVATION MUSEUM -SHIN TAKASAGO MANSION-  
100年後も色褪せない70年代の建築。  
《リノベーションミュージアム 新高砂マンション》

福岡市中央区清川にある「リノベーションミュージアム 新高砂マンション」は、鉄筋コンクリート造の7階建。今では滅多に見られなくなった昭和レトロの風情を残す街の象徴・清川ロータリーに面して、堂々と建っている。

もともと新高砂マンションはスペース R デザインの社長の実家である旅館を1977年に建替えた賃貸マンションだ。建築当時の日本はちょうど高度成長期。全国的に近代的住宅を増やすため、日本住宅公団がマンションなどの共同住宅建設を推進している時期でもあった。広いながらもプライバシーが保たれた中廊下型の共用廊下、美しい雁行型の建物レイアウト、70年代を象徴するスペイサーで開放的な廊下窓のデザイン、バルコニーの可動式ルーバー…広い土地を活かすために盛り込まれた数々の仕掛けは、現代において多くのファンを惹きつける強力なチャームポイントにちがいない。

しかし、完成当初は最新設備だった人気物件も、2000年頃には老朽化に伴い空室が目立ち始めるように。そこでスペース R デザインは2004年から、空室が出るたびに部屋のリノベーションを続けてきた。特に代表的なプロジェクトは、2008年に行った、その名も「高砂女子 R プ

ロジェクト」。このプロジェクトの特徴はグラフィックデザイナーや日本画家、ステンドグラス作家など、デザイナーがすべて女性である点。本物件のレトロな魅力と女性らしいやわらかな感性が調和した住空間こそ大きな魅力だ。そして2008年に外壁・配管改修、2011年に耐震補強工事、2013年にエレベーターなどの大規模改修を終え、「新高砂マンション」は威風堂々と築100年をめざし今も進化を遂げている。

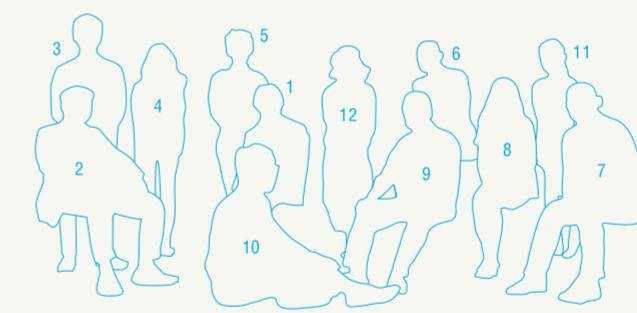
RENOVATION MUSEUM -SHIN TAKASAGO MANSION-  
リノベーションミュージアム 新高砂マンション  
【構造・規模】 RC 造7階建  
【築年】 1977年(昭和52年)  
【所在地】 福岡市中央区清川2-4-29

# space R design MEMBERSHIP!



スペース R デザイン、エンタランスカフェの個性豊かなメンバーたちをご紹介します！

INTRODUCE  
THE  
space R design  
AND  
ENTRANCE CAFE  
MEMBERS



(3) tsuyoshi kitazaki ディレクター・デザイナー 北壽 刚司

1980年福岡市生まれ。九州産業大学芸術学部卒業後、家具・店舗デザイン施工会社を経て2007年入社。これまでの賃貸のあり方に分断された「ひと」「建物」「時間」をリレーションでつなぐべく、様々なアプローチで実践。古くなることでの価値や魅力が時間と共に積み重なっていく、新しい賃貸のあり方を探索している。

(4) asako miyoshi グラフィック・WEBデザイナー 三好 麻紗子

1983年福岡市生まれ。宝塚造形芸術大学映像デザイン学科を経て2007年入社。これまでの賃貸のあり方に分断された「ひと」「建物」「時間」をリレーションでつなぐべく、様々なアプローチで実践。古くなることでの価値や魅力が時間と共に積み重なっていく、新しい賃貸のあり方を探索している。

(5) sadahisa tokunaga 不動産ディレクター 德永 勉久

1971年大分県生まれ。賃貸不動産管理/仲介会社、信託銀行系仲介会社を経て2011年入社。これまで不動産業界で培った経験とCPM®公認不動産経営管理士の視点を活かしご相談いただいた物件の収益の最大化」「価値向上」をテーマに、リノベーション事業部、Web事業部と一緒に時間と共に積み重なっていく、新しい賃貸のあり方を探索している。

(6) sachio kira ITプロデューサー 吉良 幸生

1970年大野城市生まれ。九州大学法学院修了後、建築設計、家具設計、インテリアデザイン事務所を経て2011年入社。これまでの経験を活かした再生デザインを行なっている。部屋の特徴を最大限に活かしながら、その場所特有の空気感や風景を読み取り、部屋と混ざり合って身体に響くデザインを目指している。

(7) yousuke morioka 写真デザイナー 森岡 謙介

1977年広島市生まれ。近畿大学大学院修了後、建築設計、家具設計、インテリアデザイン事務所を経て2011年入社。これまでの経験を活かした再生デザインを行なっている。部屋の特徴を最大限に活かしながら、その場所特有の空気感や風景を読み取り、部屋と混ざり合って身体に響くデザインを目指している。

(8) yukihiro maeda 経理・ENTRANCE CAFEマネジャー 前田 由季子

1980年山口県生まれ。九州国際大学付属高校卒業後、陸上長距離実業団チーム京セラへ入社。整形外科・リハビリテーション科を経て2009年入社。経理・総務全般ほか、エンタラントスカフェのマネジメントを担当。元カフェスタッフとしての経験を生かし、顧客目線によるマーケティングの実践で選ばれて愛されるカッコを目指す。

(9) satoru kobayashi 不動産プランナー 小林 苗

1981年直方市生まれ。近畿大学九州工学部建築学科卒業後、建築関係、ホテル、製菓工場、飲食関係など多様な職種を経て、2010年入社。お部屋のご案内から建物の管理までトータルでサポート。「現地」「生感」を大切にし、人と建物の幸せな関係を考えながら建物管理・仲介業務を行っている。

(10) hikaru ushijima リーシング・立ち看板 牛島 光

1985年熊本市生まれ。久留米大学文学部を卒業後、文化系NPO法人の立ち上げを経て、2010年入社。管理・仲介業務を主としながら、シェアハウス「一宇邸」や木造アパート「桜坂山ノ手庄」「たのいネイ」「リバーション文化祭」といった「建物」と「人のつながり」を切り口にしたプロジェクトのディレクションを行う。

(11) norika goto ENTRANCE CAFE店長 佐藤 紀香

久留米市生まれ。高校の食物科を卒業後、日本菓子専門学校にて洋菓子を学ぶ。パティシエ、商品企画、専門学校講師を経て2010年入社。エンタラントスカフェ店長として、「安心して毎日でも食べられる」商品を提供することを心がけ、お菓子や軽食、ドリンク作りに邁進する。

(12) sayuri aritaka ENTRANCE CAFEスタッフ 有森 小百合

人が好きだ。建物が好きだ。古いものにも愛しさを覚える。業界の常識にとらわれない自由な発想ができる。実験と研究、開発を繰り返すトライアル精神を持っている。これまで歩んできた道は違っても、ビンテージブルの可能性を信じる点では誰もが同じ。各プロジェクトの企画、営業、デザインに携わる、スペース R デザインのメンバーを紹介しよう。